

澤井先生に贈る

英文学科主任

難波雅紀

澤井勇先生に初めてお会いしたのは、『アメリカ女性文学論』を上梓された鈴江璋子先生の出版記念会が、市ヶ谷の旧私学会館で催された時のことだ。当時の私は、実践女子大学には何の縁もなく、一介のアメリカ文学研究者として会に呼んでいただいたのだが、その席で鈴江先生が引き合わせて下さったのが最初だった。小柄で物静かなのに、人を惹きつけて逸らさない。その独特の雰囲気、私はまず畏敬の念を覚えた。そして2年後、私は実践女子大学文学部英文学科に移籍し、澤井先生と一緒に仕事をさせていただくことになった。以来、公私にわたりとても親しくしていただいていた。時に仕事のことで相談にうかがうと、澤井先生は、柔和な表情とは打って変わった鋭い眼差しで、直截だが教え諭すように助言して下さる。その厳しさの向うに、私は深い情愛を感じる。

研究者としての澤井先生は、オスカー・ワイルドやウォルター・ペイターを中心に、19世紀末イギリス文学を一貫して研究され、その第一人者として日本の英文学研究の充実と発展に貢献されてきた。また、教育者としては、後進の研究の指導、奨励に情熱を注がれ、多くの優れた研究者、教育者を世に送りだしてこられた。加えて、実践女子学園理事長としての重責も長く担ってこられた。しかし、そういった話は他に譲るとして、ここではもう一つ違ったエピソードに触れておきたいと思う。

澤井先生、今は和光大学にいる元同僚の中田崇先生、そして私の3つのゼミが、かつて箱根仙石原で合同夏合宿をしたことがあった。2泊3日のスケジュールのうち、中日をまるまる勉強に充てるのも何となく勿体ないので、午後は夕食時まで自由行動にした。あの頃の学生は今と違って、芦ノ湖の遊覧船の船首に乗って映画『タイタニック』のワンシーンを真似するなど、たわいもないことに興じていた。われわれの方は、小雨と立ち込める霧の中、

幽玄な湖畔に沿って旧街道を散歩していた。9月に入れば人影もまばらで、少し肌寒い空気には秋の気配すら感じる。そんな中を男3人が並んで歩いてく歩いているのは、傍目には滑稽だったかも知れない。すると突然、澤井先生がぼつりと呟いた。はっきり聞こえたのは二言三言だったが、中田先生と私は交わす言葉を思わず呑み込んだ。耳にしたのは、「友と並びて、歩く箱根路」という、即席短歌の下の句だったのだ。葉を濡らす微かな雨音。湖面を互る薄灰色の帳。静かに軋んで揺れる木舟。そこにわれわれがいる。この時の3人が、何とも言えない心地よさに共感し、満ち足りた気分になっていたのは確かだったと思う。「友と並びて、歩く箱根路」かあ、何て粹で心豊かなんだろう。私は、閑散とした並木道を歩きつつ感慨に耽った。その後も、幾度となく箱根には足を運んできたが、その度に、私はあの日を追想し、余情に浸ってきた。「友と並びて、歩く箱根路」は、連帯を慈しんでの、ふと漏らしてしまった有り体の想いだったに違いない。そこには、実に繊細な美意識がある。それもまた、澤井先生の深い情愛に育まれたものだと私は思う。

最初にお会いしてから15年。あっという間に月日は流れ、とうとう澤井先生も定年退職を迎えられる。こうして出来事をいろいろ思い返せば、万感こもごも胸に迫る。思い出を話しだしたらきりがないので、そろそろ切り上げることにしよう。結びに、尽きせぬ感謝に敬慕を込めよう贈りたい。澤井先生、そのうちまた、ぜひ箱根路と一緒に歩きましょう。